



## 宇宙のシナリオ

大澤清輝 著

四六判, ページ 172, 1,600 円, 地人書館

解説書

お薦め度

☆☆☆☆☆

近頃は天文の講演会などで社会人やお年寄りの熱心な姿が目立つようになった。そのような人たちが一番知りたいと思っているのは、我々の宇宙はどのようになっているのか？ いつどのようにしてできたのか？ どのように解明されたのか？ これからどうなるのか？ ということである。まさにそうした要望に応えようと試みたのが本書である。

内容は、「宇宙を「見た」人たち」「銀河系と銀河」「銀河の速度・距離関係と宇宙の膨脹」「宇宙の過去の歴史」「宇宙は有限か無限か、膨脹は永続するか」の5つの章で構成されている。ウィリアム・ハーシェル以降の宇宙研究の歴史やその成果を丁寧に紹介している。本文では殆ど数式を使わずに、わかり易いすっきりとした文章が続く。

同じ観測家達への著者のいたわりや思い入れが感じられる。例えば、ハーシェルがプロとなったようすを著者は……しかし、後にプロの天文家になった時よりも忙しいアマチュア時代の方が天文学をエンジョイすることができたのではないだろうか。失礼ではあるが、私にはこの大先達の胸中をひそかに推察するのである。……と書いている。

また、ハッブルによる銀河の後退速度・距離関係についての解説では……ハッブル自身はこれが宇宙膨脹を意味するのかについてはかなり慎重で「スペクトル線の偏移がまことにドップラー効果以外の効果でないならば……」という但し書きを強調していた…と紹介し、さらに……彼には「観測者のプライド」があり、理論家の下請けをしたのではない。という気持ちがあったのかもしれない。……とも述べている。

銀河や宇宙の構造さらに宇宙誕生から現在までと明解に宇宙のシナリオを語りながら「たしかに

20世紀の後半はハーシェルの時代より宇宙の知識が増加したことは事実であるが、考えてみれば肝腎なことで不明なことは無数に残っている。」と例を挙げて述べ、病苦など人間の生活（あるいは幸せ？）そのものに対し「自然科学は究極的には無力か？」を問い、「しかし我々は希望を失ってはならない。気を確かに持って科学の発達に期待しようではないか。」と結んでいる。

全体にわたって、著者自身の豊富な経験や研究に対する観測家の視点とでもいうか慎重かつ真摯な姿勢がにじみ出ている。さまざまなエピソードも紹介されているし臨場感もある。最後には「用語の解説」、そして著者の云う……口からでませの「よた話」でないことのささやかな言い訳…として「数式による表現」の項が加えられている。親切な心遣いといえる。

宇宙を論ずる時、とかく広範囲で記述的になりがちなものだが、著者は題材を大胆に削ぎ落とし、あえて惑星そして太陽や恒星の構造の理論もはずしている。テーマを銀河系や銀河、それを包括する宇宙に絞り、しかも一般の人々にぜひ知ってほしい本筋だけに限定している。我々人間が宇宙の中に住みながら、それをどう認識して今日の宇宙像を創り上げたのかについて、その結果だけでなくそこにある歴史的な経緯や基本的で大切な考え方を理解してもらうように企てた著者の意図は見事に成功している。

著者は我が国の天体物理観測を立ち上げた方であり、そのリーダーの一人として長年にわたって活躍されている元東京天文台長の大沢清輝氏である。

伊東昌市（杉並区立科学教育センター）